

「ふらっと・西京」第5回 ～テーマ「農」～

[講師の八田さんのお話し]

私たち土の塾は、西山の麓、大原野石作町を一番大きな拠点として活動しています。今、畑と田んぼを全部で 3.7 ヘクタール、山田の里山を 12 ヘクタール管理しています。そこで会員約 300 人が楽しんでいます。

土の塾では、無農薬で野菜などを栽培していますが、これは、機械や化学に頼らず、私たちの肉体で勝負をして食べ物を作ろうという主旨で、結果として安全なものができるにすぎません。

有機栽培では、1 立方センチのサイコロぐらいの土に約 3 億の微生物がいるといわれています。目で見ていただけでは、ミミズぐらいしかわかりませんが、畑で実際に土に触れていると、いろいろな生き物に囲まれているということを実感することができます。

土の塾は「農」の活動を通じて、様々な生き物たちの命を感じることで、自然と私たちも生き生きして元気になるのだと思います。

最近日本では、高齢者をはじめ非常に多くの方が病院にお世話になっていますが、これも私たちがあまりにも土から離れて生きていること、すなわち多くの生物と一緒に時間を送らないといったことが原因で、体も五感も衰えていった結果ではないかと思っています。

「生きる」ということは、戦いながら自分の命を守るということだと思います。それは、自分が生きていく中で、軽々しく命を奪ったり、自分勝手に他の命に上下をつけたりしてはいけないということです。「虫を殺すのはいやだ」と言いながら、殺虫剤をまくことで何億の命が簡単に奪われています。今の戦争でも同じで、遠いところで誰かがボタンを押すだけで、ほとんど苦痛を感じずに人を殺すことができるようになりました。

私は、道路の舗装率を示すグラフの右肩上がりのカーブと花粉症の発症率のカーブがまったく同じであることに気がつき、土を身近に感じる環境があれば、今の花粉症やアレルギーもなくなるのではないかと考えています。私たちが土から離れていることが諸悪の根源ではないかと信じています。

昨今は様々な野生動物が我々の作物を襲いますが、電気柵には頼らず、自分たちでできる柵などで防ごうとしています。サルの被害を防ぐことはできませんが、イノシシやシカなどはなんとかなるものです。その柵の材料も、放置竹林の竹や利用されることが少なくなった間伐材を使っています。

さて、土の塾では自分の食べ物を作るということを基本に活動してきましたが、私たち自身が野生を取り戻さないと、「本物」にはなれないのではないかと思うようになってきました。そのために、12ヘクタールの山を整備し、山を知り生態を知り、生き物を知りながら、野性を取り戻すことができるのではないかと考えています。

そんな中で、30年以上の太さ30センチほどもある間伐材でさえ、採算を考えると、利用されずに山に放置されているのは、あまりにももったいないということで、それを利用した野外ステージを作っています。自然の中で、竹や木が立っている中で声を出すと、非常に心地よい響きをするわけです。何回か試しに音楽会を開催して、本格的に音楽をやっている方にも歌っていただきましたし、一方で専門的には音楽をやっていない人にも歌っていただきました。

土の塾には、いろいろな障害のある方やたまたま病気を持った方もいらっしゃいます。そして、土と触れながら、「みんなを受け入れてやっていこう。」という方が集まっていて、そのことは障害を持った方にとっても非常に心地の良い環境になっているようです。

先日の音楽会でも、普通のコンサートホールでの音楽会には行けないような、突然叫びだしたり、走り回りだしたりする方々も堂々と来られ、あるときは静かに聴いていたり、あるときは叫んだりしました。それでも、会場の皆さんはそれを当たり前のように受け止めて、コンサートが終わりました。これまでのコンサートでも、途中で動物や鳥、風などが騒いだりしましたが、不思議と人が真剣に歌っている間は、自然のものたちも黙るように思います。

私は自閉症の彼が叫んでいたのも、これと同じなのではないかと思いました。そして、実は私たちが歌ったり、泣いたりしているのも、同じなのではないかとも思ったのです。我々の野外ステージで囃らずもそういった、すべての生き物と一緒にした音楽会が実現したことに大きな喜びを感じました。

畑や山での活動をしていると、これまで自分たちがいかに「一人勝ち」を求めてきたか、「一人勝ち」を求めることがいかに間違ったことかを感じることができます。

さて、西京区というのは山あり、畑あり、そして落ち着いた住宅街がある、実にパランスの取れたすばらしい区だと思います。農に注目すると、大原野や大枝、桂川の河川敷などが面的な中心ですが、街中の小規模な農地でも熱心に野菜や花などの農業が続けられています。しかも、大枝の柿は昔からの名産ですし、大原野・大枝のタケノコも全国一を誇る京都のタケノコの半分を占めるなど、日本中に威張れる産地であります。

野菜についても、旬を大切に作る農業が中心に営まれています。このような地元の野菜を皆さんもぜひ愛していただきたいと思います。幸い京都市では、「農業を続けていく」ということで生産緑地の指定を受けた農家が80%を占めるなど、他の都市に比べて極めて多い状況にあり、そういう農地に支えられて、「京野菜」があり「京料理」があるわけです。

今、日本中で農業は儲からないということで、後継者不足や高齢化などが進み、全国的には大変な面積の荒廃地があります。京都市にも、80%という生産緑地の高い指定率にもかかわらず、30ヘクタールの遊休地があります。これを、市民1人当たり20㎡耕すとする、今から実に1万5千人の市民が参加できることになる。20㎡というのは、農業経験のない人が畑をするには十分な面積で、結構忙しく楽しめる程度の面積になります。

身近に農地があるということは、実にすばらしいことであり、生物の多様性を保ち、洪水を防ぎ、地下水を守るなど多様な働きがある。しかし、このような効果は農地が完全に使われた状態でなければ発揮されないわけです。そういった意味でも、皆さんも山や畑に関心を持っていろいろな活動に取り組んでいただきたいと考えています。

[参加された方からのご意見]

- ・市内の小学校では、田んぼづくりをしているところもある。
- ・地域のイベントで、休耕田を無料で借りようとしたが、農家さんに断られたことがある。
- ・「農」「命」の観点で子ども向けの実践が考えられないか。
- ・色々なものに過敏になっている一方で、観察力や感じる力が低下していると思う。
- ・実際に、職業として農業をやろうと思えば、機械や薬を利用しなければ食べていけない。